

政治的な結末が今日の過剰人口状態にまで顕在化したのだと考へるのを至當としよう。そして末期的な人口危機への杞憂がこゝでは却つて顯在的な過剰人口の姿で實感されているといつてよいのである。

對策はそれだけ積極的かつ基本的でなければならぬ。我が國近代社會の構造的な變革を出發點とするものでなければならぬ。過剰人口を低賃金勞働の資源として利用することはすでに不可能でもあり、また二度と過去のあやまちを繰り返すべきでもない。健全な民主主義的基盤の上に國民生活再建の方途を講ずる以外に生きる途はないわけで、まさしくこの近代國家の世界史的な動向への自覺を我が國現下の人口問題は強要し且つ要請するのである。たゞその方途が多難で且つその効果が相當に遠い將來にしか期待し難いところから、人々は躁急な過剰人口對策を模索する。産兒制限の普及をこの國難打開の萬能藥視する傾向もその一つの現われに外ならないが、近代市民としての永い精神的訓練を前提とするこの市民的教養が恰もモンペをスカートにはきかえるように無難に身につけることができたとしても、それが當面の食糧問題の解決に何程の實效があるかは多少の統計的計算の勞をいとわれないならば極めて明瞭なことである。いうまでもなく個々の家庭にとつては一回の妊娠と一人の出生兒の存否は特に我が國今日の世情にあつて極めて重大な事件である。産兒制限は一段と今後に普及をみるに相違なく、その正しい指導と啓蒙とが差し當つての緊要事であることはいうまでもないが、しかし人口政策的觀點から要望せられる本格的な産兒制限思想の普及と實行とは單なる啓蒙的指導の能くしうるどころではないことを特に銘記せねばなるまいと思う。(昭和二二・九・二五)

昭和二十五年までの

推計將來人口の改算

館 稔

上 田 正 夫

窪 田 嘉 彰

高 木 尙 文

一、推計將來人口改算の事情

我々が本誌前號で分析した¹⁾經濟安定本部統計研究會の昭和二十五年までの推計將來人口が、その後の新しい資料に基いて改算せられた。本研究所において改算の作業を擔當した關係上、我々は以下簡単にこれを説明して参考にしようと思う。

昭和二十一年八月、第一次推計將來人口(本誌前號で分析したもの。以下このように略稱する。)が發表せられて以來、我々は、常に事實と推計との差について検討をおこたらなかつた。上掲の稿において我々は、昭和二十一年末に至るまでの検討の結果を略説しておいた。今、その後の結果をあわせてその要點を列記すると次の如くである。

(一) 昭和二十一年十月一日現在で、事實は第一次推計の中央の値よりも八萬余多かつた。この差は事實の〇・一一%に當つてゐる。

(二) 昭和二十二年一月一日現在で、事實は第一次推計の中央の値よりも九七萬だけ少なかった。この差は事實の一・二七%に當つてゐる。

(三) 昭和二十二年四月一日現在で、事實は第一次推計の中央の値よりも五七萬だけ少なかった。この差は事實の〇・七三%に當つてゐる。事實と推計とが以上のような差を生じた主な理由は次の如くである。

(1) 引揚歸還の延期——第一次推計では昭和二十一年末までに引揚歸還を完了すると假定したが、事實は後に述べる如く遅れて來てゐる。

引揚歸還の延期による事實と推計との差が支配的に大きな地位をしめてゐる。上の(三)の如く、昭和二十二年四月一日現在の差が(二)の同二十二年一月一日現在の差よりも縮少してゐるのはそのためである。

(2) 日本人以外の人口の送還の停滯——第一次推計では、日本人以外の人口で退去を希望するものの送還は昭和二十一年九月末までに完了するものと假定したが、後に述べる如く非常に停滯した。

(3) 自然増加の擴大——出生は事實と推計と非常に接近してゐるが、死亡は推計よりも事實において著しく改善せられた。

要するに、事實と推計との差は割合から云えば極めて微細であつて、推計が最も多く事實から離れた昭和二十二年一月一日現在を見てもわずかに一・二七%に過ぎない。従つて、第一次推計は事實に對して今日なお極めて高い價値をもつてゐるのであつて、この點から必ずしも改算が必要であるとは云えない。また、昭和二十二年十月一日には臨時國勢調査が行われ、恐らく、全國についての男女年齢別の集計は同二十二年内に完了するであろう。この結果を待つて改算を行うのが正しく常道である。ところが、人口の實數は七千萬、八千萬という大きな數値である。事實との差の割合は微小であつても、その實數は、實際の行政上の企畫等に用うる場合には

相當大きな意味をもつて來る。しかも、現に、行政上の企畫に際してこのような要求が現われている。例えば、經濟安定本部における昭和二十三年度を初年度とし、三カ年にわたる經濟長期計畫の立案上の要求、農林省における米穀需給計畫上の要求等がそれである。かかる實踐上の要求がこの度の改算を促したというべきである。なお、理論的には、昭和二十二年十月一日の臨時國勢調査の結果に基づいて再び改算されるべきである。行政上の要求も恐らくこれと競合するであろう。

二、改算推計人口の改算方針と方法²⁾

(一) 改算方針と推計の前提條件

改算は、極力必要なる最小限度に止め、第一次推計の方法をなるべく變更しない方針がとられた。この改算において新しく用いた資料は主として第一次推計人口推計以後關係各廳において作られたものであつて、改算時昭和二十二年七月二十日現在で利用し得るものであるが、未だ完全なるものとはいひ得ない。従つて、この改算も確定的なものとはいひれない。

第一次推計人口の前提條件はそのままとした。但し、第一次推計人口の前提條件第四號(四、海外在留邦人の引揚及び復員歸還は昭和二十一年内に、歸還希望者の日本退去は昭和二十一年九月末日までに完了すること)は、その後明らかに實情に適しなくなつたのでこれを取り止め、後に述べる如く、既往の事實に基づき推計をもつておきかえた。即ち、この改算推計人口の前提條件は次の如くである。

- (1) 廣汎なる地域にわたり地震、水害、凶作等の天災が起らぬこと。
- (2) その他豫測すべからざる非常の事態が起らぬこと。

- (3) 一般に經濟狀態が漸次恢復の方向に向ふこと。
 (4) 日本人人口の推計に重點を置くこと。

(二) 日本人人口の推計方法

1 推計方法

第一次推計人口と同様、基準人口の男女年齢別各歳人口に逐次生存率を適用して各年の人口構成を推計する方法がとられた。

2 推計地域

推計地域についても、第一次推計人口と同様昭和二十一年四月二十六日人口調査實施の地域とする。

3 推計期間

第一次推計と同様、昭和二十一年四月二十六日以降昭和二十五年十月一日に至る毎年十月一日現在。

4 推計基準人口

第一次推計と同様、昭和二十一年四月二十六日人口調査による男女年齢各歳別日本人人口(昭和二十一年六月二日現在訂正)總數七二、八七五、六〇二人、内男三四、七四九、一四七人、女三八、一二六、四五五人を基準とする。

5 推計基準人口の男女年齢各歳別人口の推計

前號の男女年齢各歳別人口は數え年であるから、これを満年齢に換算した第一次推計の男女年齢各歳別人口をとつた。

第一次推計人口における基準人口の満年齢換算方法を參考としてかかげれば次の如くである。數え年X歳の人口を一月一日より四月末日までの出生の確率(大正十四年以降昭和九年に至る十年間の男女別平均)と五月一日以降十二月末日までの出生の確率との比によりて分ち、一月以降四

月までの出生のものは満年齢(X-1)歳とし、五月以降十二月までの出生のものは満年齢(X)歳とする。但し、男女満年齢十歳までの人口については生存率の時間による變化が著しいから、各年齢毎の月別出生實數(人口動態統計による)に第六回生命表の生存率を乗じたものの比を以て數え年男女各歳人口により男女各満年齢人口を推計し、これに基ずいて満年齢人口を推計する。

6 自然動態の推計

A 出生

(a) 昭和二十一年五月以降同年九月までの出生數については總理廳統計局調による人口動態調査臨時特例及び人口動態統計速報の結果によることとしたが、使用に當つて若干の補正を施し、この期間の出生總數を七九・五萬とした。

(b) 昭和二十一年十月から同二十二年九月までの出生については、昭和二十一年十月から同二十二年四月までは總理廳統計局調の人口動態統計毎月概數を用い、同二十二年五月分は人口動態統計速報の結果を補正して用いた。更に事實の得られない昭和二十二年六月から同年九月までについては前記の期間の出生數から推計される年間出生率が三二・六%となるので、これと同率の出生があり、且つ從來見られた出生の季節的變動があるものと假定して推計した。これによる昭和二十一年十月から昭和二十二年九月までの出生總數は二四五萬となる。

(c) 昭和二十二年十月以降の出生については第一次推計の通り、昭和二十五年に至つて大正九年以降昭和十七年に至る出生率減退の直線傾向線の昭和二十五年の位置まで低下するものと假定し、昭和二十三年以降同二十五年までは直線的に低下するものとして補間すれば次の表の第一推計欄の

如き出生率を得る。

年次

第一推計

第二推計

昭和二十二年

三二・六%

三二・六%

昭和二十三年

三〇・六

二九・七

昭和二十四年

二八・六

二六・九

昭和二十五年

二六・五

二四・〇

(d) 昭和二十三年以降の出生率の減退傾向につき前號(c)の直線傾向線の代りに、大正九年以降昭和十四年に至る出生率減退の傾向線を用いれば前の表の第二推計欄の如くなる。この表の第一推計欄の數値を用いて第一推計を、第二推計欄の數値を用いて第二推計を行つた。

B 死亡

(a) 昭和二十一年五月以降同年九月までの死亡數については總理廳統計局調による人口動態調査臨時特例及び人口動態統計速報の結果によることとしたが、使用に當つて若干の補正を施し、この期間の死亡總數を五二萬とした。

(b) 昭和二十一年十月から同二十二年九月までの死亡については、昭和二十一年十月から同二十二年四月までは總理廳統計局調の人口動態統計毎月概數を用い、同二十二年五月分は人口動態統計速報の結果を補正して用いた。更に事實の得られない昭和二十二年六月から同年九月までについては前記の期間の死亡數から推計される年間死亡率が一六・二七%となり、これに對して基準人口に第六回生命表の死亡率($0x$)を適用した場合の總死亡率が一六・〇一%となるので、この二つの總死亡率を比較すると極めて接近しているからこの期間を通じて死亡率は第六回生命表の($0x$)が存続するものと假定する。生命表における男女年齢別死亡率の定義によつてこの推計ではすべて $0x$ と $0x+1$ との平均を以て X 歳の死亡率と

し、これを1から引いて X 歳の生存率として用いる。

(c) 昭和二十二年十月以降の死亡については、最近の事實に基ずく死亡率が比較的安定していることにかんがみ、以後、昭和二十五年十月に至るまで第六回生命表の $0x$ が持續するものと假定する。

(b) 海外からの引揚歸還者の死亡についてはすべて第六回生命表の $0x$ を適用して全人口の死亡にこれを含ましめた。

7 在外復員軍人の歸還及び海外居留民の引揚

A 引揚接護院の調査によれば、昭和二十一年五月以降九月までの在外復員軍人の歸還及び海外居留民の引揚はそれぞれ一一一萬、八六萬計一九六萬であつてこの數値を用いる。

B 前號と同様の資料によれば、昭和二十一年十月から同二十二年五月までの在外復員軍人の歸還及び海外居留民の引揚はそれぞれ二八萬、六三萬、計九〇萬であつてこの數値を用いる。

C 昭和二十二年六月以降における在外復員軍人の歸還及び海外居留民の引揚については、昭和二十一年十一月から同二十二年五月までの事實の一月平均歸還數八萬が持續するものと假定する。また引揚接護院の調査によれば、昭和二十二年五月末現在における在外復員軍人の殘留數は六六萬海外居留民の殘留數は三五萬、計一〇二萬であるから、昭和二十三年六月を以て引揚歸還を完了するものと假定する。

D 在外復員軍人の年齢構成については、第一次推計と同様、昭和二十一年四月二十六日現在人口につき男子兵役年齢の年齢別人口を、これに對應する女子の年齢別人口と比較し、昭和二十一年四月二十六日現在における在外未歸還復員軍人の年齢構成係數とし、これを基礎としてそれ以後における年齢の變化を考慮する。

E 引揚海外居留民の男女年齢別構成は、第一次推計と同様、在朝鮮居留民については昭和十九年二月二十二日人口調査による朝鮮在住日本人人口の男女年齢別構成によりこれを推計し、朝鮮以外の地域については昭和十五年十月一日國勢調査による海外在留日本人の男女年齢別構成によつてこれを推計する。

(三) 日本人以外の人口の推計方法

1 第一次推計と同様、昭和二十一年四月二十六日人口調査實施地域内に在る朝鮮人、臺灣省民、沖繩人及びその他の外國人にしてそれぞれ朝鮮、臺灣、沖繩及びその他の外國へ歸還を希望する者は昭和二十一年三月十八日現在をもつて厚生省において調査した登録歸還希望者数から引揚援護院調査による同年三月十八日以降四月二十五日に至る歸還者を控除して推計する。推計の結果は次の如くである。

- (イ) 朝鮮人 四四八千人
- (ロ) 臺灣省民 一一千人
- (ハ) 沖繩人 一四〇千人
- (ニ) その他の外國人 二千人

計 六〇二千人

2 第一次推計と同様、同人口調査實施地域内に在る、朝鮮人、臺灣省民及び外國人にして日本に残留を希望する者は同調査の結果及び内務省の調査によると次の如くである。

- (イ) 朝鮮人にして日本に残留を希望する者 一三三千人
- (ロ) 臺灣省民にして日本に残留を希望する者 六千人
- (ハ) 外國人にして日本に残留を希望する者 一八千人

計 二五七千人

3 引揚援護院の調査により、昭和二十一年五月以降九月までの日本人以外の人口の送還数は八萬とし、同二十一年十月以降同二十二年五月までの送還数は一二萬とする。現在の實状にかんがみ昭和二十二年六月以降においては送還なきものと假定する。

4 事實上日本に残留する日本人以外の人口の自然増加は日本人の第一推計と同様であると假定する。

三、改算推計人口の結果とその分析

以上の方法によつて得た改算推計人口の結果とそれに基づいて第一次推計人口と同様に詳細に分析して得た結果の中の主要な事項のみを次にかかげよう。

(一) 改算推計人口の各年次總人口は第一表の通りで、昭和二十五年には最大値である第一推計は八、一八一萬で、最小値である第二推計は八、一四三萬である。昭和十年に較べると基準人口は六%多く昭和二十五年は一八%多い。

第一表 男女別推計人口

年次	總人口		日本人口	
	男	女	男	女
昭和三、四、五	七、七〇六	七、四〇六	七、八三三	七、四〇六
昭和六、七、八	八、一〇六	七、九〇六	八、一〇六	七、九〇六
昭和九、一〇、一一	八、三三三	八、一〇六	八、三三三	八、一〇六
昭和一二、一三、一四	八、五〇六	八、三三三	八、五〇六	八、三三三
昭和一七、一八、一九	八、六三三	八、四六〇	八、六三三	八、四六〇
昭和二〇、二一、二二	八、七六〇	八、五八七	八、七六〇	八、五八七
昭和二五、二六、二七	八、八八七	八、七一四	八、八八七	八、七一四

第一推計

少いが、昭和二十五年までに〇―四歳は實數、比率ともさらに一層少くなるのに對し五―九歳は實數は大となるが、比率は昭和十年よりも一層少くなつてゐる。以上の傾向は女の方が著しい。

(三) 總人口の各年次間の増加は基準時から昭和二十五年十月までの四年五カ月間に最大八〇七萬、最小七七〇萬に達する。この期間において日本人以外の人口は一六萬の減少を示しているから、自本人人口のみについてみると第二表の通り最大八二四萬、最小七八六萬という從來その比をみないほう大な増加を示している。

第二表 男女別推計人口の増加

期 間	實 數		率(各前年=100)		各期間増加中に男の割合
	男	女	男	女	
昭三、四、五―三、十、一	二、三三〇	二、一七五	三	三	三七・三
昭三、十、一―三、十、一	二、四八八	二、四〇〇	三	四	三〇・七
昭三、十、一―三、十、一	二、四八八	二、四〇〇	三	四	三〇・七

第一推計

昭三、十、一―三、十、一	二、三三〇	二、一七五	三	三	三七・三
昭三、十、一―三、十、一	二、四八八	二、四〇〇	三	四	三〇・七
昭三、十、一―三、十、一	二、四八八	二、四〇〇	三	四	三〇・七

第三表 男女別増加人口中にしめる復員及び引揚による増加

期 間	增加總數	實 數			自然増加	割 合 (增加總數=100.0)		
		復 員	引 揚	自然増加		復 員	引 揚	自然増加
昭三、四、五―三、十、一	二、三三七	一、一〇七	八七〇	三七四	四七・五	三七・三	一五・二	
昭三、十、一―三、十、一	二、四八三	四〇三	八五五	一、三三四	一六・四	三三・三	五〇・三	
昭三、十、一―三、十、一	二、四八三	四〇三	八五五	一、三三四	一六・四	三三・三	五〇・三	

第二推計

昭三、十、一―三、十、一	一、八三三	五、六五五	二、三三	一、五	七	六三・三
昭三、十、一―三、十、一	一、七三三	一、四一	三	三	三〇	六七
昭三、十、一―三、十、一	一、八三三	四、一	一〇	二	一〇	五〇・六
昭三、十、一―三、十、一	一、六四	三、〇九	八	八	五〇・五	
昭三、四、五―三、十、一	一、七、八七	五、〇九	二、七六五	一、〇八	一、〇	六四・八

中央數値

昭三、十、一―三、十、一	一、一、七、八一	一、一、七、八一	一、一、七、八一	一、一、七、八一	一、一、七、八一	一、一、七、八一
昭三、十、一―三、十、一	一、一、四、〇	一、一、四、〇	一、一、四、〇	一、一、四、〇	一、一、四、〇	一、一、四、〇
昭三、十、一―三、十、一	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七
昭三、十、一―三、十、一	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七	一、一、七、七
昭三、四、五―三、十、一	一、一、八、〇、四	一、一、八、〇、四	一、一、八、〇、四	一、一、八、〇、四	一、一、八、〇、四	一、一、八、〇、四

(1) この中復員者の歸還が第三表の通り二〇四萬で増加總數の二五―二六%をしめ、居留民の引揚が一八三萬で二二―二三%をしめてゐるので、この兩者による増加が三八七萬となり、自然増加は第一推計は残りの四三六萬で増加總數の五三%、第二推計では三九八萬で同じく五一%に當つてゐる。

(2) 増加總數の六四―六五%は男人口の増加で最大五二八萬、最小五〇九萬に上り、女人口の増加は二七六―二九五萬で男の半分に過ぎない。(以下數項については文末の第一圖及び第二圖参照。)

昭三、四、六—五、一〇、一 八、三七七 二、〇四二 一、八八八 四、四四四 一〇〇・〇 三四・八 三三・三 五〇・〇

第二推計

昭三、一〇、一—三、一〇、一 一、七三三 五、五五 一、五九 一、〇三一 一〇〇・〇 三三・三 九・一 五九・六

昭三、四、六—五、一〇、一 七、八七七 三、〇四五 一、八八八 三、九八五 一〇〇・〇 三六・〇 三三・三 五〇・七

(b) 男

昭三、四、六—三、一〇、一 一、七三七 一、一〇七 四、四六 一、四四 一〇〇・〇 六四・一 二七・六 八・四

昭三、一〇、一—三、一〇、一 一、四八八 四、〇〇三 四、四三 六、三三 一〇〇・〇 三三・一 三〇・四 四三・五

第一推計

昭三、一〇、一—三、一〇、一 一、二七五 五、五五 一、〇七 五、四四 一〇〇・〇 四四・五 七・四 四三・一

昭三、四、六—五、一〇、一 五、三六五 二、〇四五 一、〇五 二、三三五 一〇〇・〇 三六・七 一九・三 四三・一

第二推計

昭三、一〇、一—三、一〇、一 一、一四一 五、五五 一、〇七 五、〇 一〇〇・〇 四六・九 七・六 四三・五

昭三、四、六—五、一〇、一 五、〇九三 三、〇四五 一、〇五 三、〇三一 一〇〇・〇 四〇・三 一九・九 三九・九

(c) 女

昭三、四、六—三、一〇、一 五、二〇 三、六二 一、二九 二、九 一〇〇・〇 七四・七 三三・七 三五・三

昭三、一〇、一—三、一〇、一 六、四 三、三三 三、三三 六、〇一 一〇〇・〇 一〇〇・〇 七〇・六 三三・四

第一推計

昭三、一〇、一—三、一〇、一 六、四 三、三三 三、三三 六、〇一 一〇〇・〇 一〇〇・〇 七〇・六 三三・四

昭三、四、六—五、一〇、一 二、九五三 一、八三 二、二九 三、二五 一〇〇・〇 一〇〇・〇 三三・五 三三・五

第二推計

昭三、一〇、一—三、一〇、一 七、一 三、三三 三、三三 六、〇一 一〇〇・〇 一〇〇・〇 七〇・六 三三・四

昭三、四、六—五、一〇、一 二、七五五 一、八三 二、二九 三、二五 一〇〇・〇 一〇〇・〇 三三・五 三三・五

(a) 男の増加の中三九—四〇%に當る二〇四萬は復員により、一九—二〇%に當る一〇二萬は引揚による増加であるから、自然増加は残りの四〇—四二%に當り最大二二三萬、最小二〇三萬となつてゐる。

(b) 女の増加の中二八—二九%に當る八一萬は引揚による増加であるから、自然増加は残りの一九五—二一四萬であつて、男との差は少ない。

(3) 増加人口を年齢三區分別にみれば第五表の通りである。即ち

(a) 老年人口は各年次間一〇萬前後で増加數に大した差を示さず全期間の増加は四六萬であるが、幼少年人口は昭和二十一年十月—二十二年十月の五八萬を最大として次第に増加數を減じ、第一推計では昭和二十四—二十五間に、第二推計では昭和二十三—二十五間に絶對減少となつて全期

間に前者は一二二萬、後者は八四萬の増加を示している。

(b) しかるに生産年齢人口は昭和二十一年四月―十月の増加が最も多くて一九二萬、昭和二十一年十月―二十二年十月に一七六萬、昭和二十二―二十三年に一四〇萬の増加で以後の二カ年に各七〇萬餘を増して増加數を減ずるとはいえ全期間増加は六五五萬の多きに達する。

(c) 従つて全期間についてみれば増加總數の中老年人口の増加は六%、幼少年人口は一一・一五%なのに對し、生産年齢人口は八〇―八三%に上る。

(4) 生産年齢人口の増加は男では増加總數の八四―八七%に上り、女でも増加總數の七二―七七%に上つており、各期間とも増加總數の中の大部分をしめている。

(a) 生産年齢人口の増加中男のしめる割合は昭和二十三年までは常に六〇%を超え、全期間平均しても六七%に達して、女の増加は男の半分を過ぎない。

(b) さらに全期間の男の増加四四二萬の中四六%に當る二〇四萬は復員により、一六%に當る七一萬は引揚による増加で、自然増加は残りの三八%、一六六萬に過ぎない。女の増加二一四萬の中二五%に當る五二萬は引揚による増加で、自然増加は残りの七五%、一六一萬となつてゐる。

(c) 従つて女では昭和二十二年十月までの増加は四六%で、各期間別にそれほどかたよつた増加ではないのに、男では昭和二十二年十月までに六一%、昭和二十三年までの増加が八三%に達している。

(5) 生産年齢人口の増加を年齢五歳階級別にみると、

(a) 男の二〇―二九歳の全期間の増加は二五七萬、五八%をしめており、一五―一九歳、三〇―三九歳の各年齢階級もこれについて増加數が多

い。いうまでもなく復員、引揚による増加はこれらの年齢に集中してゐて、二〇―二四歳では全増加の四四%、二五―二九歳は七四%をしめてゐるが、その上自然増加も實數からみると各々七四萬、二三萬で相當多い。

(b) 女も二〇―二九歳の増加が九二萬で四三%をしめ、三五―三九歳、四〇―四四歳の増加が他の年齢階級に比しやや多い。引揚による増加は二〇―二四歳が二七%、二五―二九歳が一九%に過ぎないが、實數としては他の年齢階級よりも多く、自然増加も又、最も多くなつてゐる。

(c) 従つてこれらの年齢階級においては、昭和二十二年又は二十三年までの増加が全期間の中の大部分をしめることとなつてゐる。

(6) 幼少年人口の中で、

(a) 〇―四歳の増加は全期間に第一推計では六三萬であるが、第二推計ではその四割にもみたない二五萬である。この中引揚を除けば、自然増加は第一推計は三九萬であるが、第二推計は一萬餘に過ぎない。いうまでもなく推計の假定である出生率の相異に基づいてゐる。

(b) 五―九歳の増加はこれより多く六九萬に上り、昭和二十三―二十四年に多少の減少を示すとはいへ、なお自然増加は五二萬の多きに上つてゐる。

(c) 一〇―一四歳は昭和二十二年以降ほとんど毎年減少を示して全期間に九萬の絶対減少となつており、引揚による増加を考えれば自然増加は二萬の減少となつてゐるのは戦時中の出生減退によるものである。

(四) 増加率についてみると第二表の通り日本人人口の増加率は全期間に第一推計一一三%、第二推計一〇八%を示しており、戦前の國勢調査間の増加率中最も高い大正十四―昭和五年の七九%に比して約一・四倍に當

つてゐる。

(1) これを期間別、男女別にみると第二表の通り、

(a) 昭和二十一年四月―十月の五カ月間に三一%、次の一カ年間に三三%の高率を示し、次の一年間には二二%となるが、以後の二年間にはこの約半分となり、昭和十―十五年の年幾何平均増加率一一%にほぼ近くなる。

(b) 全期間における男の増加率は第一推計一五二%、第二推計一四七%で、女の増加率(それぞれ七七%、七三%)の二倍に上つてゐる。

(2) 年齢三區分別にみると第五表の通り、

(a) 老年人口の増加率は全期間に八一%で、昭和五―十年の同年齢の増加率七七%に近い。男は女に比してやや高いが、各年次間においてそれほどかたよつた率は示していない。

(b) しかし幼年人口は第一推計四七%、第二推計三二%で、昭和五―十年のこの年齢八三%に較べればそれぞれ六割、四割に過ぎない。男は女よりもやや高い程度であるが、次第に率を減じて昭和二十五年に近づくに従い減少を示すに至る。

(c) これらに對して生産年齢人口増加率は全期間に一六〇%で、同年齢人口の戦前の國勢調査間における最高率である大正十四―昭和五年の八六%の約二倍という高率である。特に男は二三三%で女の九七%の二・四倍の高率を示し、女は大正十四―昭和五年の八五%よりもやや高い程度なのに對し、男は同期間の八八%の二・六倍に上つてゐる。

かくて男は昭和二十三年までの各期間の増加率は以後のその二倍以上

の高率となつていて、男女増加率の差もこの期間に甚だしく、昭和二十三年以後になつて漸く男女ほぼ同様となる。

(3) さらにこれを五歳階級別にみると、

(a) 生産年齢人口の中二〇―二四歳、二五―二九歳の増加率は全期間にそれぞれ二八三%、三八三%という高率である。この年齢階級でも女はそれぞれ一一四%、一八五%で、他の年齢階級との差はそれほど大きくないが、男はそれぞれ五一五%、六九二%で他の年齢階級に比してはるかに高く、過去に例をみない高率を示している。その他では三〇―三九歳、五〇―五四歳の各年齢階級が一〇〇%臺の増加率を示している。四〇―五四歳の各年齢階級のみは女の増加率が男よりも高い。

(b) 幼年人口の中、〇―四歳は全期間に第一推計は六九%で、同年齢の大正十四―昭和五年の九〇%よりは低く、第二推計は二七%で戦前の最低である昭和五―十年の三五%よりも低率である。五―九歳は八一%で昭和五―十年の九八%よりも低くなつてゐる。しかるに一〇―一四歳のみは昭和二十二年以後毎年減少で、全期間に一一%の減少となつてゐるのは過去に例がない。幼年人口の増加率は各年齢階級とも男女の差はわずかで、男の方が女よりもやや高い程度である。

(c) 老年人口の中では七五―七九歳の増加率が全期間に二六二%で最も高く、七〇―七四歳の一一六%がこれに高い。六〇―六四歳、八〇歳以上を除いては女の増加率の方が男よりも高い。

第四表 男女年齢五歳階級別推計人口の構成

A 第一推計

昭和二十五年までの推計將來人口の改算

五—一九歲	四、九六	四、三六三	四、五三	四、六四	四、七九	四、六四	五、九〇	五、八四	五、八三	五、九五	五、七三
一〇—一四歲	四、三六	四、四〇三	四、四五	四、四〇	四、三三〇	四、三三	五、九八	五、八六	五、七〇	五、六八	五、三三
一五—一九歲	三、九七	四、〇〇九	四、一七	四、三六	四、二八六	四、二八六	五、三	五、三	五、三	五、三〇	五、六八
二〇—二四歲	二、五四	三、〇四一	三、四〇〇	三、六九	三、八四九	四、〇五	四、〇五	四、〇五	四、〇六	四、六九	四、七五
二五—二九歲	一、八六	二、三五三	二、四八二	二、八二五	二、九四四	三、〇七三	三、〇九	三、〇〇	三、五	三、七	三、七
三〇—三四歲	一、九六	二、三六〇	二、四八二	二、五〇	二、四八七	二、五八	三、〇	三、〇〇	三、二六	三、一〇	三、一〇
三五—三九歲	二、〇七	二、三五	二、三三	二、四〇	二、四三五	二、四九	二、七	二、六	三、〇四	三、〇三	三、〇〇
四〇—四四歲	二、〇四	二、〇四三	二、〇六四	二、一〇七	二、一五〇	二、一九	二、七	二、六	二、六	二、六八	二、七
四五—四九歲	一、八六	一、八七九	一、九四八	一、九七	一、九八八	一、九八一	二、〇九	二、〇七	二、〇六	二、〇六	二、〇六
五〇—五四歲	一、五六	一、五五	一、六〇五	一、六四九	一、六七四	一、六九一	二、〇九	二、〇七	二、〇七	二、〇八	二、〇八
五五—五九歲	一、二七	一、三六	一、三三	一、三〇	一、三三〇	一、三六〇	一、七	一、七	一、六	一、六	一、六
六〇—六四歲	九、五	一、〇〇一	一、〇一三	一、〇八	一、〇九	一、〇九	一、一	一、一	一、一	一、一	一、一
六五—六九歲	七、五	七、三	七、三	七、五	七、九	七、八	一、〇四	一、〇一	一、〇〇	一、〇九	一、〇六
七〇—七四歲	四、七	四、五	四、四	四、四	四、五〇	四、五七	〇、六四	〇、六三	〇、六三	〇、六三	〇、六四
七五—七九歲	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	〇、六	〇、七	〇、六	〇、六	〇、六
八〇歲 以上	一、〇五	一、〇五	一、〇六	一、〇九	一、一一	一、二二	〇、四	〇、一四	〇、一三	〇、一三	〇、一三
(c) 女	八、二六	八、六七	九、〇一	四、三〇四	四、六七八	四、〇七八	五、三	五、四	五、〇六	五、〇六	五、〇六
〇—一四歲	二、九五	二、〇八五	一、三、五四	一、三、五四	一、三、五四	一、三、五四	一、七、七	一、七、三	一、七、三	一、七、三	一、六、七
一五—一九歲	三、二九	三、二九四	三、三、四	三、三、四	三、三、六八	三、四、〇七	三、九、六	三、九、六	三、九、六	三、九、六	三、九、六
六〇歲 以上	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、九、四	三、九、四	三、九、四	三、九、四	三、九、四
〇—四歲	四、四六	四、四八〇	四、六〇	四、六七五	四、六三三	四、七六	五、〇、三	五、〇、三	五、〇、三	五、〇、三	五、〇、三
五—九歲	四、〇三	四、三六四	四、四八	四、五〇三	四、六八	四、五八	五、七	五、七〇	五、七〇	五、七〇	五、七〇
一〇—一四歲	四、八三	四、三三〇	四、三三七	四、三五五	四、三五	四、三三	五、八八	五、七五	五、五九	五、四四	五、三〇
一五—一九歲	三、九八	四、〇三七	四、一三六	四、一四九	四、一六三	四、一八三	五、四	五、三	五、三	五、三	五、三
二〇—二四歲	三、四四	三、五五	三、六三	三、七九	三、八四六	三、八八〇	四、七	四、七五	四、七	四、七	四、七
二五—二九歲	二、八四	二、九二	三、〇三	三、一七	三、二八七	三、三五	三、九	三、八	三、九	三、九	三、九
三〇—三四歲	二、六九	二、六八	二、七四	二、七九	二、七〇九	二、七七一	三、六	三、五	三、五	三、五	三、五
三五—三九歲	二、三六	二、四四	二、五四	二、五三	二、五六六	二、六〇	三、六	三、六	三、六	三、六	三、六
四〇—四四歲	二、〇三	二、〇三	二、〇七	二、一四	二、一五	二、一五	二、七	二、七	二、七	二、七	二、七

昭和二十五年までの推計將來人口の改算

年齢階級	總數					
	(a)			(b)		
四五一四九歲	一七五	一八〇	一八四	一九三	一九九	一九四
五〇一五四歲	一四七〇	一四四〇	一四〇〇	一五五	一六四	一六八
五五一五九歲	一〇〇〇	一〇一〇	一〇三〇	一〇〇〇	一〇一〇	一〇二〇
六〇一六四歲	一、二四	一、二二	一、二六	一、二五	一、二五	一、二七
六五一六九歲	九四	九七	九九	九七	九七	九七
七〇一七四歲	六四	六五	六三	六八	六六	六六
七五—七九歲	三〇	三〇	三六	三五	三六	三六
八〇歲以上	三〇	三〇	三四	三二	三三	三三

B 第二推計及び中央數值

年齢階級

1 第二推計

(イ) 實數 (單位 100人)

(五歲以上は第一推計と同様であるから省略する)

(ウ) 推計 (各年次總人口 100,000)

年齢階級	總數					
	(a)			(b)		
四五一四九歲	七、二七	八〇、一〇	八〇、七三	九一、一五	九一、五八	九〇、七三
五〇一五四歲	九、四〇	九、三五〇	九、九五	四七、六八	四七、七四	四六、四三
五五一五九歲	七、三三	七、三三	七、三三	二七、六六	二七、七二	二七、四九
六〇一六四歲	二、一七	二、一七	二、一七	二六、九	二六、九	二六、九
六五一六九歲	二、一七	二、一七	二、一七	二六、九	二六、九	二六、九
七〇一七四歲	二、一七	二、一七	二、一七	二六、九	二六、九	二六、九
七五—七九歲	二、一七	二、一七	二、一七	二六、九	二六、九	二六、九
八〇歲以上	二、一七	二、一七	二、一七	二六、九	二六、九	二六、九

男

女

三五―三九歳	六・六	六・六	六・三	三・四	三・三	三・一	三・三	三・三
四〇―四四歳	五・四	五・四	五・五	二・六	二・六	二・七	二・六	二・七
四五―四九歳	四・九	四・九	四・九	二・四	二・四	二・四	二・四	二・四
五〇―五四歳	四・八	四・三	四・七	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
五五―五九歳	三・四	三・三	三・六	一・六	一・六	一・六	一・六	一・六
六〇―六四歳	二・四	二・七	二・八	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三
六五―六九歳	二・〇	二・九	二・七	〇・九	〇・九	〇・九	〇・九	〇・九
七〇―七四歳	一・五	一・五	一・五	〇・七	〇・七	〇・七	〇・七	〇・七
七五―七九歳	〇・七	〇・七	〇・八	〇・元	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
八〇歳以上	〇・四	〇・四	〇・四	〇・二	〇・四	〇・四	〇・六	〇・七

2 中央 數 值 (五歳以上は第一推計と同様であるから省略する)

(イ) 實 數 (單位 一〇〇人)

總 數	七,三三〇	八〇,三〇六	八〇,九三三	三九,一三三	三九,五七五	三九,九八八	四〇,一八八	四〇,六三〇	四〇,九八五
〇―四 歳	九,四三三	九,四三七	九,四八三	四,七八五	四,七四三	四,八一	四,六五六	四,六五五	四,六七三
〇―一四 歳	三七,三七八	三七,三三九	三七,二二二	一三,八〇三	一三,八四一	一三,九三二	一三,四七五	一三,四九八	一三,四三一
(ロ) 判 合 (各年次總人口 一〇〇,〇〇〇)									
總 數	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	四九,三三三	四九,三三三	四九,三三三	四九,三三三	四九,三三三	四九,三三三
〇―一四 歳	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇
一五―一九 歳	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇
一五―一九 歳	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇
六〇歳以上	三,〇〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
〇―四 歳	二・九	二・九	二・九	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
五―九 歳	二・四	二・四	二・四	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
一〇―一四 歳	二・〇	二・〇	二・〇	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
一五―一九 歳	一・五	一・五	一・五	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
二〇―二四 歳	一・〇	一・〇	一・〇	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
二五―二九 歳	〇・五	〇・五	〇・五	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
三〇―三四 歳	〇・五	〇・五	〇・五	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
三五―三九 歳	〇・三	〇・三	〇・三	〇・二	〇・二	〇・二	〇・二	〇・二	〇・二

昭和二十五年までの推計將來人口の改算

C 中央數値 (五歳以上は第一推計と同様であるから省略する)

〇—一四歳	一五	三九	五九	九	△	二二	三七	一〇	三	七	△	一	△	八	三〇
(a) 總數	三、三〇	二、四三	一、七四	八、六	七	八、〇四	三	三	三	三	三	三	三	三	三
〇—四歳	元	三六	一三	△	七	四七	三	三	元	二	△	〇	二	九	二〇
〇—一四歳	三九	五九	三六	△	一六	一、〇六	二	二	三	九	△	△	五	五	四
(b) 男	一、七七	一、四八	一、二天	一、〇〇	三三	五、一八	五	四	三	三	三	三	三	九	一、〇
〇—四歳	一四	一七	一〇	△	四	三三	三	三	三	二	△	九	一	五	五
〇—一四歳	一四	三〇	一四	△	九	四七	二	三	三	九	△	△	四	四	四
(c) 女	五〇	九四	七七	△	一〇	二、八天	三	三	三	二	△	三	二	五	五
〇—四歳	一五	一元	〇	△	五	三六	三	元	元	二	△	二	二	九	四
〇—一四歳	一五	三九	二三	△	三	四〇	三	三	三	二	△	△	五	五	四
(五)	以上のような増加の中で自然増加のみに注目すると、昭和二十一年四月—十月の五ヵ月間に二七萬であるが、昭和二十一年十月—二十二年十月には一二三萬という大きな數に上つてゐる。つづく三年間にはほぼ過去の例に近い増加數となり、第一推計は一〇九萬、九六萬、八一萬となつて、全期間には四三六萬を示し、昭和二十六年五年間の自然増加四三四萬或は昭和二十六年の四三三萬に近い増加數である。一方第二推計は昭和二十二年—二十五年の三年間に一〇二萬、八三萬、六二萬と減退の度が第一推計よりもやや強く、全期間には三九八萬となり、大正十一—昭和元年の自然増加三九六萬にほぼ近い増加數を示している。														

第六表 女子の年齢別特殊出生率 (各年齢女子人口一、〇〇〇に付)

年齢	昭和二十二年		昭和二十三年		昭和二十四年		昭和二十五年		昭和二十二年
	本	推計	本	推計	本	推計	本	推計	
一五歳	〇・五	〇・九	〇・六	〇・八	〇・七	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六
一六歳	四・八	三・三	三・八	三・五	三・五	三・三	三・三	三・三	四・三
一七歳	二・五	一〇・元	一〇・八	九・四	九・六	八・八	八・五	八・三	二・八
一八歳	七・五	六・六	五・元	四・六	三・八	三・三	三・〇	三・〇	六・七
一九歳	五・七	五・〇	四・六	四・六	四・六	四・六	四・六	四・六	五・〇
二〇歳	九・八	九・〇	八・三	八・三	八・三	八・三	八・三	八・三	一〇・三
二一歳	一四・元	一三・六	一三・九	一三・元	一三・元	一三・元	一三・元	一三・元	一四・九
二二歳	一八・八	一七・八	一七・八	一七・八	一七・八	一七・八	一七・八	一七・八	一八・九
二三歳	三四・七	三〇・六	二九・七	二八・七	二八・七	二八・七	二八・七	二八・七	三六・七
二四歳	三三・〇	三二・五	三二・五	三二・五	三二・五	三二・五	三二・五	三二・五	三六・七
二五歳	三四・〇	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三四・八

次に前號に平行してこの推計において假定した出生率と死亡率とによつて將來人口の再生産率を算定し、人口再生産の見地から、ここに假定した出生率と死亡率とが増殖力の變動上もつ意義を明らかにしようと思ふ。

まず改算による昭和二十二—二十五年における女子の特殊出生率をか

二六歳	三三・三	三六・四	三三・七	三三・〇	一九・四	一四・八	一六・四	一五・七
二七歳	三三・四	三六・六	三三・九	三〇・六	一七・六	一五・三	一四・九	一四・五
二八歳	三三・九	三三・四	三五・八	三〇・四	一四・四	一八・五	一七・六	一五・六
二九歳	三三・五	三二・七	三一・七	三〇・九	一九・八	一八・七	一六・八	一五・五
三〇歳	三三・四	三〇・四	二四・五	一五・九	一八・六	一七・四	一五・五	一三・七
三一歳	三三・五	三三・六	一七・四	一八・四	一七・五	一七・四	一五・六	一三・六
三二歳	三三・六	一五・五	一九・九	一八・四	一七・三	一七・〇	一五・三	一四・五
三三歳	一八・七	一八・八	一八・三	一七・五	一五・九	一四・六	一三・五	一三・五
三四歳	一七・七	一五・九	一七・三	一四・四	一五・五	一四・九	一三・八	一三・四
三五歳	一七・三	一四・六	一五・八	一五・六	一四・四	一四・四	一三・八	一三・三
三六歳	一六・九	一五・七	一四・三	一四・五	一三・四	一三・四	一三・三	一三・四
三七歳	一四・五	一四・〇	一五・九	一三・〇	一三・六	一三・九	一三・九	一三・六
三八歳	一三・四	一七・六	一三・四	一八・五	一三・四	一三・八	一三・六	一三・六
三九歳	一三・六	一三・三	一九・七	一五・四	一四・八	一四・六	一三・七	一三・九
四〇歳	一三・三	一三・七	一三・九	一四・八	一三・五	一三・七	一三・三	一三・三
四一歳	一三・三	一三・八	一三・八	一三・五	一三・四	一三・六	一三・七	一三・六
四二歳	一三・四	一三・七	一三・三	一三・五	一三・三	一三・四	一三・六	一三・六
四三歳	一三・三	一三・九	一三・四	一三・五	一三・四	一三・五	一三・七	一三・七
四四歳	一三・六	一三・四	一三・六	一三・〇	一三・三	一三・四	一三・五	一三・五
四五歳	一三・七	一三・九	一四・五	一四・〇	一三・六	一三・七	一三・七	一三・七
四六歳	一三・九	一三・七	一四・七	一四・〇	一三・七	一三・四	一三・四	一三・四
四七歳	一三・五	一三・七	一五・三	一四・〇	一三・九	一三・九	一三・九	一三・九
四八歳	一三・三	一三・六	一三・五	一三・四	一三・三	一三・四	一三・五	一三・五
四九歳	一三・二	一三・三	一三・四	一三・七	一三・三	一三・三	一三・五	一三・五

この第六表によつて總再生産率を算定すると第七表の如くである。

第七表 推計人口における總再生産率比較

昭和五年	二・三〇一
昭和十二年	二・二一七
昭和二十二年	二・〇九五
昭和二十三年	一・九六八
昭和二十四年	一・八二七
昭和二十五年	一・六七九

この結果を第一次推計において算定した總再生産率と比較するとき、それぞれの推計において假定された出生率の變化に對應した變動を示している。

(二) 純再生産率

各年次を通じて1xとして第一、第二推計とも第六回の生命表の1xを用いればよいから、これを用いて純再生産率を算定すれば第八表の如くである。

第八表 推計人口における純再生産率

年次	第一推計	第二推計
大正十四年	一・五四八	一・五二四
昭和五年	一・五二四	一・四八三
昭和十二年	一・四八三	一・四六七
昭和二十二年	一・四六七	一・三三八
昭和二十三年	一・三七八	一・二〇三
昭和二十四年	一・二七九	一・〇六四
昭和二十五年	一・二七五	

上表によれば第一、第二推計とも十分に人口再生産の能力を有し、出生率は相當急速度の減退を假定しているにかかわらず、死亡率の低下が一層急激なため、人口再生産の見地からみた人口増殖力の減退は戦前に比すれば著しいとしても未だ一を割らない結果となる。

五、改算推計人口と第一次推計人口との比較

以上においてこの改算推計人口の結果を概観したわけであるが、さらに第一次推計人口と比較してみると次の如くである(第九表参照)。

(一) 日本人人口

まず日本人人口のみについてみるに、昭和二十一年十月においては改算推計人口は、前に記した通り昭和二十一年四月二十六日の人口調査人口を基礎とし、これに昭和二十一年五月九月各月の日本人の自然増加及び引揚、歸還の實績を加除して推計したものであるが、これは第一次推計人口に較べて總數で四四萬、男で三八萬、女で六萬、何れも少くなつてゐる。

昭和二十二年においては第一推計では總數が八萬、男が四一萬何れも少く女のみ三四萬多しのに對して、第二推計は男のみ三七萬少く、總數は二萬、女は三九萬多い。昭和二十三年以降は第一、第二兩推計とも同様な傾向を示し、第一次推計人口に比較し、改算推計人口が、總數男女とも急激に多くなつており、昭和二十三年では總數一一〇一三三七萬、男四五五一五八萬、女六五一一八〇萬、昭和二十四年では總數一三三三萬一一八六萬、男五六一八〇萬、女七七一一〇六萬、昭和二十五年では總數一二九一二二六萬、男五四一九四萬、女七五一一二二萬と何れも多い。このことは第一〇萬で明らかな如く、昭和二十一年十月においては、第一次推計人口の場合の

第九表 改算推計人口と第一次推計人口との比較 (單位 一〇〇〇人)

年次	總數		男		女	
	改算推計人口	第一次推計人口	改算推計人口	第一次推計人口	改算推計人口	第一次推計人口
(一) 日本人人口						
昭和二十一年	七三、七六	七三、八六	三三、七〇	三三、七〇	三〇、〇六	三〇、〇六
昭和二十二年	五五、二三	五五、五五	二四、〇三	二四、〇三	三一、二〇	三一、二〇
昭和二十三年	一一〇、一三	一一〇、一三	五五、五五	五五、五五	五四、五八	五四、五八
昭和二十四年	一三三、三三	一三三、三三	六五、一八	六五、一八	六八、一五	六八、一五
昭和二十五年	一二九、一二	一二九、一二	六五、一八	六五、一八	六四、〇四	六四、〇四

自然増加が改算推計人口では、死亡率の改善によつて、相當増加しているにかかわらず、日本人の引揚、歸還がそれ以上に少かつたことによるものであり、昭和二十二年でも改算推計人口の少いのは引揚、歸還の減を自然増加の増が超過していても、それが、前年の減少を相殺出來なかつたことによるものである。昭和二十三年における急増は自然増加の増に引揚、歸還が加算されたことにより、昭和二十四、二十五年においては、前年からの増加の持越しと自然増加とによつて右のような増加となつてゐる。

昭和二十五年における改算推計人口と第一次推計人口との差を年齢三區分別にみると、生産年齢人口は一四一三四萬程度で最も少く、老年人口は二五一一三六萬でこれに對してやや多い。これに對し幼年人口は第一推計で九〇萬、第二推計では一四七萬の多きに達している。即ち改算推計人口は第一次推計人口の第二推計人口に比して死亡率改善の度が強くなつてゐるあらわれとみられる。基準人口は同一であるから昭和二十五年の比較は同時に昭和二十一―二十五年の増加数の開きをも示している。即ち第一推計が一二九萬、第二推計は二一七萬で、この差の中最も大きいのは幼年人口が、第一次推計人口と著しく異なつた點で改算推計人口では第一次推計人口の第二推計における如き絶対減少を示すことはない。

(△は減)

第一推計

昭	二二、一〇、一	七、五〇四	七、六四一	△	七	三七、九〇四	三六、七六六	△	四三	元、六〇一	元、三五五	三三
昭	二三、一〇、一	九、三〇四	九、三〇四		一、一〇一	元、三九	三六、六九	△	四〇	四〇、三〇四	元、五〇四	三三
昭	二四、一〇、一	八、〇三三	七、九七		一、三六	元、六〇四	元、〇六五		五九	四〇、六七	元、九三	三七
昭	二五、一〇、一	八、二二	九、八四		一、六九	四〇、〇〇四	元、四三		四一	四一、〇七八	四〇、三三	三七
昭	二二、一〇、一	七、五〇四	七、五〇四		三	三七、九〇四	三六、三〇	△	三六	元、六〇一	元、三三	三八
昭	二三、一〇、一	九、三〇四	九、三〇四		一、三七	元、一〇五	三六、五三		五五	四〇、一七	元、三〇四	三七
昭	二四、一〇、一	八、〇三三	八、三〇		一、八〇	元、五五	三六、七三		八〇	四〇、五八	元、五七	三七
昭	二五、一〇、一	八、〇七三	九、五八		二、六	元、八四	三六、八〇		九四	四〇、八九	元、六九	一、三三

中央數値

昭	二二、一〇、一	七、五〇四	七、五〇三	△	六	三七、九〇四	三六、五三	△	三九	元、六〇一	元、三三	三二
昭	二三、一〇、一	九、三〇四	九、〇七四		一、三	元、三三	三六、六〇		五三	四〇、一八	元、四〇四	三七
昭	二四、一〇、一	八、〇三三	八、六三		一、五三	元、七〇四	三六、八三		六一	四〇、三	元、七〇	三七
昭	二五、一〇、一	八、〇九三	九、一六		一、七六	元、九八	元、一六		七四	四〇、九五	四〇、〇〇	九三

(二〇) 日本人以外の人口

昭	二二、一〇、一	八、二	八、二	〇	五	五八	五八		〇	三〇〇	三〇〇	〇
昭	二三、一〇、一	九、一	九、一		五	五八	一六		一	三三	九	一八
昭	二四、一〇、一	九、一	九、一		五	五八	一六		一	三三	九	一八
昭	二五、一〇、一	九、一	九、一		五	五八	一六		一	三三	九	一八

(二一) 總人口

昭	二二、一〇、一	七、七〇四	七、七〇四	一	五	三五、三〇七	三五、三〇七		一	元、四六	元、四六	一
昭	二三、一〇、一	九、三〇四	九、三〇四		五	元、九八	三七、〇七	△	四	元、九〇	元、七三	一
昭	二四、一〇、一	八、〇三三	七、八八		五	元、九八	三七、〇七	△	四	元、九〇	元、七三	一
昭	二五、一〇、一	八、〇七三	九、一六		五	元、九八	三七、〇七	△	四	元、九〇	元、七三	一

第一推計

昭	二二、一〇、一	七、三三	七、八八		三	元、三九	三六、五〇	△	一	元、八七	元、三五	四
昭	二三、一〇、一	九、〇三	九、〇三		三	元、五九	三六、八八		七	四〇、四六	元、六四	八
昭	二四、一〇、一	八、〇九	九、三六		三	四〇、〇六七	元、三三		八	四〇、九四	四〇、〇三	九

昭二五、二〇、一	八、八〇八	八〇、〇〇八	一、七二〇	四〇、四六一	元、六五五	八六	四二、三三七	四〇、四三三	九〇三
第二推計									
昭二二、二〇、一	七、三三三	七、六〇二	三、五五	元、六九八	元、六八八	△	九	元、八三七	元、三〇三
昭二三、二〇、一	七、九七〇	七、六四〇	一、七三三	元、五五五	元、六九八	八〇	四〇、四三三	元、四〇五	九〇
昭二四、二〇、一	八、七九七	七、五二二	三、六七	元、九六九	元、八三三	一、〇七	四〇、八三九	元、六六九	一、三〇
昭二五、二〇、一	八、四四九	七、八三三	三、五九	四〇、三六八	元、七三三	一、三六	四二、一四〇	元、七六一	一、三九
中央數値									
昭二二、二〇、一	七、三三三	七、六〇二	三、五五	元、六九八	元、六八八	△	九	元、八三七	元、三〇三
昭二三、二〇、一	七、九七〇	七、六四〇	一、七三三	元、五五五	元、六九八	八〇	四〇、四三三	元、四〇五	九〇
昭二四、二〇、一	八、七九七	七、五二二	三、六七	元、九六九	元、八三三	一、〇七	四〇、八三九	元、六六九	一、三〇
昭二五、二〇、一	八、四四九	七、八三三	三、五九	四〇、三六八	元、七三三	一、三六	四二、一四〇	元、七六一	一、三九

(二) 日本人以外の人口

次に日本人以外の人口については、各年次とも改算推計人口が第一次推計人口より多く、昭和二十一年十月では總數五三萬、男三四萬、女一八萬、昭和二十二年では、その増加が前年よりわずかに減少し、總數四一萬、男二七萬、女一五萬の増加を示し、昭和二十三年、昭和二十四年と年と共に増加の程度がわずかながら増して昭和二十五年では總數四三萬、男二七萬、女一六萬の増を示している。このことは日本人以外の人口の日本退去が、第一次推計人口の際に調査結果に基いた退去豫定數より、はるかに下廻つたこと及び第一次推計人口の場合より自然増加が多くなつたためである。

(三) 總人口

右のような結果、日本人と日本人以外の人口を合した總人口についてみると、昭和二十一年十月においては、改算推計人口は第一次推計人口に較べ總數は八萬多いが、男は四萬少く、女は又一三萬多くなつてゐる。昭和二十二年では、總數が三四—四四萬多く、男は一四—一〇萬逆に少く、女は四八—五四萬多くなつてゐる。昭和二十三年以降は、改算推計人口の方

が、總數男女ともに、急激に増加しており、昭和二十三年では總數一五二—一七九萬、男七二—八五萬、女八〇—九五萬、昭和二十四年では總數一七五—二二九萬、男八三—一〇八萬、女九二—一二二萬、昭和二十五年では總數一七二—二二六〇萬、男八二—一二二萬、女九〇—一三八萬と何れもその増加が殖えてきている。これらの差を、中央數値の總數について、分析してみると、第一〇表の如く、昭和二十一年においては日本人の引揚、歸還は改算推計人口の方が六六萬も少かつたのに對し、日本人以外の人口の日本退去が五二萬も少かつたことによつて、かなり相殺され、その上、自然増加の増が多くなつてゐるため總人口を増加せしめてゐる。昭和二十二年では、改算推計人口の方が、日本人の引揚歸還が三五萬少く、又日本人以外の人口の日本退去が一二萬あつたに對し、自然増加が七七萬も多かつたため、かえつて總人口は三〇萬も多くなり、前年の増加とともに、三九萬の増加となつてゐる。昭和二十三年は、日本人以外の人口の退去はなく、日本人の引揚、歸還と自然増加によつて、増加が著しくなつてゐる。昭和二十四、二十五年は自然増加の差のみによつて、既往の増加が僅かながら殖えてゐることを示してゐる。

第一〇表 改算推計人口と第一次推計人口との差の分析 (單位 一,〇〇〇人)

期 間	改算總人口の増減	自然増加		引揚・歸還		退 去	
		改算推計人口 推計人口	第一次推計人口 推計人口	改算推計人口 推計人口	第一次推計人口 推計人口	改算推計人口 推計人口	第一次推計人口 推計人口
(一) 日本人人口 (中央數値)							
昭三、四、三—三、一〇、一	△ 四三	三〇	三〇	一、九〇	三、六五	△ 六〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	△ 六	一、三三	四三	一、三五	一、五五	△ 三〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	一、三六	一、〇三	四三	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	一、九三	八六	五九	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	一、七六	七三	五三	〇	〇	〇	〇
(二) 日本人以外の人口							
昭三、四、三—三、一〇、一	五五	三	〇	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	四四	二	二	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	四二	九	二	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	四七	八	二	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	四二	七	六	〇	〇	〇	〇
(三) 總人口 (中央數値)							
昭三、四、三—三、一〇、一	△ 三	三三	三〇	一、九〇	三、六五	△ 六〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	△ 六	一、三四	四三	一、三五	一、五五	△ 三〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	一、五九	一、〇三	四三	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	二、〇〇	九四	五九	〇	〇	〇	〇
昭三、一〇、一—三、一〇、一	二、一五	七四	五九	〇	〇	〇	〇

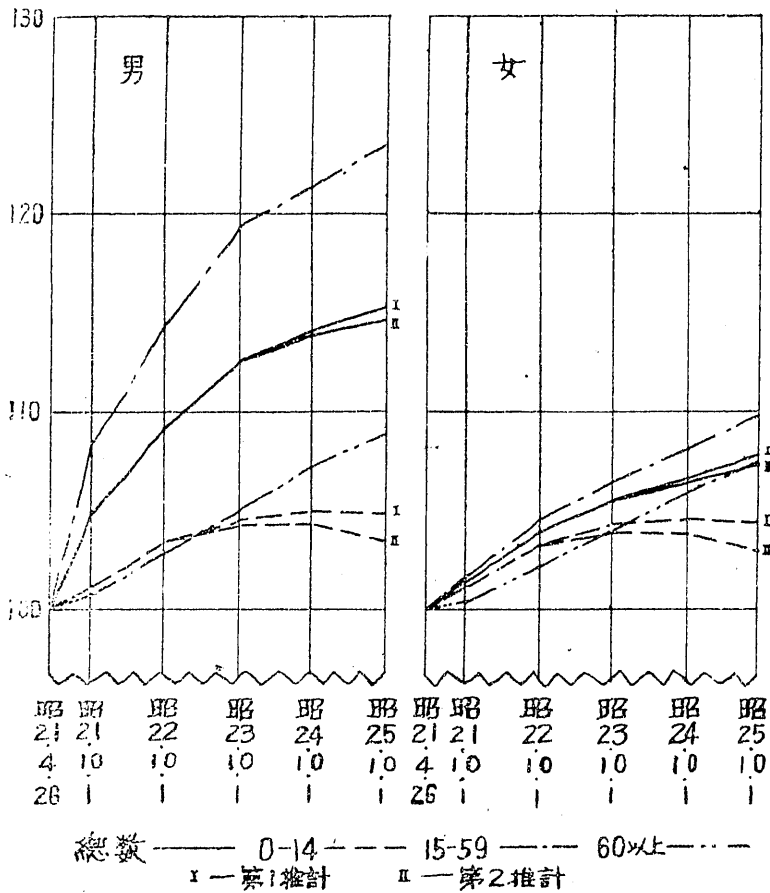
(四) 括 要

以上、要するにこの改算推計人口と、第一次推計人口との差異の起因の主なものとして、(1)死亡率が第一次推計人口の際の豫想より著しく良好となつたため、自然増加が相當多くなつたこと、(2)日本人の引揚、歸還が計畫より著しく遅延したこと、(3)日本人以外の人口の日本退去が、計畫より

もはるかに少なかつたこと、を擧げることが出來よう。

このように、今度の改算によると、昭和二十五年までの推計將來人口は、第一次推計のそれよりも、總人口は第一推計が一七二萬、第二推計は二六〇萬多くなつてゐる。いわゆる、八、〇〇〇萬人口は、第一推計では昭和二十

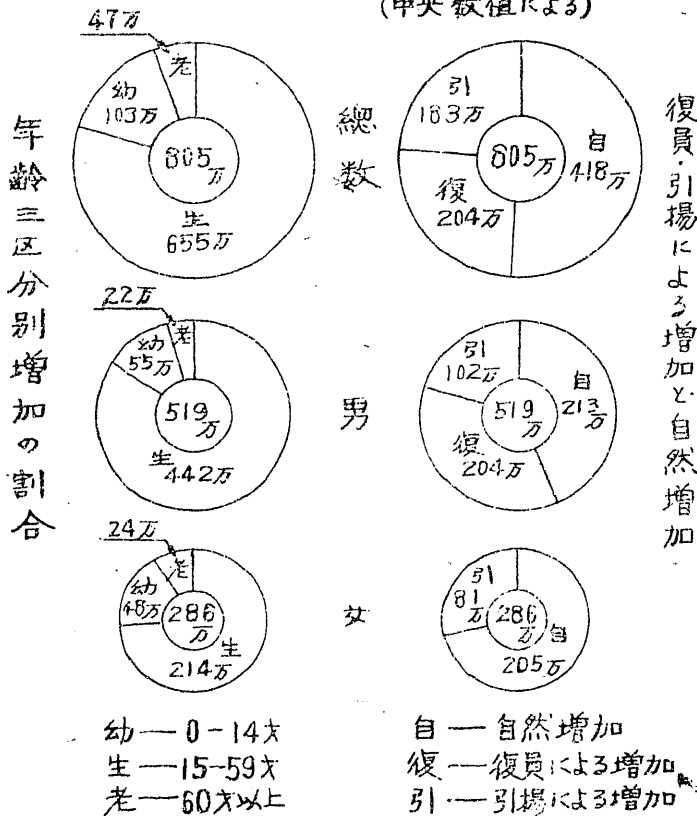
第1圖 男女年齢3区分別推計人口の増加指数



三年十月直前において、又、第二推計でも、昭和二十三年—二十四年間に於いて、實現することとなつてゐる。その人口増加は、ほとんど大部分が生産年齢人口のそれであり、推計基準時から四年五ヵ月間に六五五萬の増加を持ち、その中、六割餘が男で、女の増加の二倍に上り、出生率の減退にもかかわらず、昭和二十三年以降、年平均七〇萬餘の生産年齢人口を持つてゐる。この推計人口の語る重要な特色である。

かくて推計地域における、昭和二十五年の人口密度は、一方料に付き、最大二二〇、最少二一九となる。この限られた國土に集積せる、このぼろ

第2圖 増加人口805万の内訳 (中央数值による)



大な人口を如何なる産業によつて、如何に收容し扶養すべきか、さらに地域的に如何に配置すべきか。近い将来における我が國再建のあらゆる方策はまずこの推計人口の特色の明確な認識に出發せねばなるまい。

註 1) 箱・上田・窪田・高木「昭和二十五年までの推計人口の分析」—人口問題研究第五卷第三・四・五・六號 昭和二十二年六月。

2) 經濟安定本部統計調査資料第一號、昭和二十一年八月比較参照。

3) 總理廳統計局「人口動態統計毎月概數」参照。

(昭和二二・九・一〇)